
銀河鉄道殺人事件

山口多聞

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

銀河鉄道殺人事件

【NZコード】

N4229B

【作者名】

山口多聞

【あらすじ】

銀河を走る銀河鉄道。その車内で殺人事件が発生する。惑星ベイカへ戻るため乗り合わせていた少年探偵工藤新一は、出動したSDFシリウス小隊とともに事件解決に挑む。名探偵コナンと銀河鉄道物語のコラボです。失われし物を求めてと平行して連載するため、連載は不定期となります。

出発の時（前書き）

この話は、今TBS系で放送中の銀河鉄道物語と名探偵コナンを混ぜたらどうなるかという、作者の妄想の下で作られた実験作品です。そういう話が苦手な方は読むのをお控えください。

出発の時

「俺の名前は工藤新一。17歳。大学を飛び級合格し、今は私立探偵をしている。もちろん、公認だ。6つの惑星国家と、3つの星団国家から承認を受け、第一級探偵としての資格を授与されてる。最近じゃマスコミの間で少年探偵なんて呼ばれてる。親の話じゃ、うちの家系は今は消滅してしまった太陽系第三惑星地球の出身で、代々探偵をやっているそうだ。俺の名前もずっと昔に、地球で探偵として活躍したご先祖様からもらつたんだって。そして俺は今日、惑星ディステイニーでの仕事を終え、家のある惑星ベイカへ向かおうとしていた。」

列車に乗る前、新一は恋人に電話をかけていた。相手の名前は森蘭という同じく先祖が地球出身の17歳の少女である。ちなみに、新一は両親から自分の名と同じのご先祖が、同じ名前の女性と結婚したと聞かされた時は何か運命めいた物を感じた。

蘭

「じゃあ今日帰つてくれるのね？」

新一

「ああ、事件は片付いたからな。次の列車でそつちに戻る。」

蘭

「じゃあ惑星大会見に来てくれるわね？」

蘭の言う惑星大会とは、ベイカで行われる空手の全惑星大会の事

だ。蘭は空手が得意なのだ。ちなみに、新一はかつての「先祖様の蘭も空手が得意だった」と聞いている。

と、そこで新一は時計を見て気づいた。

新一

「もちろん。ああ、悪い。列車がもうすぐ出るから。じゃあ。」

新一は電話を切ると、列車へ向かう。

アナウンス

「12時ちょうど発、白鳥座方面、急行910号にご乗車の方は、56番線へお急ぎください。見送りの方は、ホームでお見送りください。」

構内にアナウンスが流れる。新一が乗るのはこの列車だ。新一の家がある惑星ベイカは最初の停車駅で、この列車だと約2時間半の距離である。

ちなみに銀河鉄道には001から1000までの列車があり、この内最初に0が付く番号の列車はSDFの戦闘用車両だ。

SDFとは space defence force、銀河鉄道の一部門である空間鉄道警備隊の略で、主に銀河鉄道内で起こる事故や犯罪への対処、そして場合によつては宇宙海賊の討伐が任務である。

新一は910号に乗り込む。しばらくすると、発車のベルが鳴り、910号は動き出した。8両編成の列車はしばらく駅構内の線路を走ると、上昇軌道に入った。そしてそのまま空間軌道に入る。

数え切れないほどの線路が並び、宇宙中からひつきりなしに列車が往来し、全銀河鉄道の路線の始発駅であるディスティニー駅を眺めながら、列車は急激に上昇する。10分もしないうちに、列車は宇宙空間に出た。

出発の時（後書き）

と言つ訳で始まりです。この作品の主人公工藤新一はコナンの中の工藤新一の子孫という設定です。

失われし物を求めて連載中ですので、更新はかなり遅いですが、どうかよろしく。

感想、意見お待ちしています。

事件発生！！

新一を乗せた銀河鉄道910号は、漆黒の宇宙区間をひた走る。銀河鉄道の車両には人口重力発生装置がついているから、宇宙区間でも快適な旅が出来る。窓の外には雄大な宇宙の景色が広がり、時折1・5宇宙km毎に設置された、空間シールド発生用の軌道リングが後方へと通り過ぎる。

惑星デステイニーを出て30分が経つた。そこへ、車掌がやつて来た。銀河鉄道では今も古風に車掌が一両一両回つて来る。やつてきたのは人間の車掌だった。最近では、ロボットが車掌を勤めている車両も少なくない。

車掌

「次の停車駅、惑星ベイカまでは約2時間です。今しばらくおくつろぎください。」

「後2時間か。」

心の中でそう新一はつぶやく。ベイカに戻るのは一週間ぶりだ。つまり、家族や彼女の顔を拝むのも一週間ぶりだ。心は自然と明るいものとなる。

しかし、そんな新一の気分をぶち壊す事態が発生した。

？

「キヤアア！！！」

女性の悲鳴である。

「なんだ？」

「どうした？」

他の乗客も何事とばかりに振り返る。新一はすぐに声のした方向に走った。声がしたのは車両間のデッキからだった。この車両にはそこにトイレが設けられていた。

車両の扉が開き、新一の目にひときわいた女性の姿が入ってきた。

新一

「大丈夫ですか？」

女性に声をかけるが、彼女は口をパクパク動かすばかりで要領を得ない。

新一

「どうしたんです？」

近づいて女性を支える。そうすると、彼女は指でトイレのある方向を指した。

新一がそつちを見ると、男性が便器につづぶせになっていた。

新一

「これはー？」

新一が近づこうとした。そこへ、車掌が走ってきた。

車掌

「二、これは！？お密さん。勝手に中へ入らないでください。」

新一は探偵証明証を見せる。

新一

「一級探偵の工藤新一です。銀河鉄道からも公認されています。」

一級探偵はその認められた惑星国家や組織によつて司法権や事件捜査権が与えられている。簡単に言えばほとんど警官と同じだ。

車掌

「あ、失礼しました。」

車掌が敬礼する。

新一

「では、まず列車を停止させてください。それと、SDFに緊急出動の要請をお願いします。これは明らかに殺人事件です。」

車掌

「わかりました。」

SDFの司令部は、天井に浮かぶ球形の路線図を中心とした円形のテーブルに、一日中オペレーターが張り付き、列車や駅から発進

される緊急信号に対処する。

その司令部に、緊急事態発生を知らせる警報が鳴り響く。

オペレーター

「白鳥座方面へ向かっていた、急行910号内にて殺人事件発生。乗客1名が死亡。列車は現状維持のために惑星ベイカより1600宇宙kmで緊急停止。SDFに出動要請入電。」

SDFの現司令官は、叩き上げの元アークトウルス小隊小隊長、藤堂兵五郎である。彼の決断は素早かった。

藤堂司令

「ただちに、シリウス小隊に出動命令。」

事件発生ーー（後書き）

と言ひ訳で事件発生。次回、精銳シリウス小隊がついに出動します。

発進

SDF（空間鉄道警備隊）の車両は出場の際は旅客列車などが使用するホームからではなく、地下の専用車両整備場から一端引き上げられて、それから発進用線路を使って出場する。

そして今、司令部より出場命令を受けたシリウス小隊専用警邏車両、車両ナンバー001、ビッグワンが出場準備にかかっていた。

車内には既に隊員たちが乗り込み、出場準備に入っていた。ちなみに、銀河鉄道の車両は全て機関車が牽引する方式なので、常時決まった隊員が乗り込むのは機関車だけだ。

隊長

「システムチェック！」

隊長のショワーン・ヘルト・バルジが隊長席で言う。彼は勤続16年、そして最年少で隊長になつた経歴を持つベテランだ。普段は真面目だが、いざとなつたら規則も上層部からの命令も無視し、己の正しい道を行く事から、実直な詐欺師というあだ名がある。

デビット

「システムチェック、スタンバイ！」

運転パートのデビット・ヤング。シリウス小隊では隊長に次ぐ年長者。酒と女、そして賭けが好きと問題は多いが、操縦技術はピカイチだ。

ルイ

「軌道通信レーダー異常なし」

レーダーパートのルイ・フォード・ドレイク。クラリオス星団共和国大統領の一人娘。束縛された生活が嫌でSDFに入った変り種だ。

ユキ

「ミッションデータダウンロード完了」

そう告げるのはユキだ。ユキは人間ではない。人間の体を元に作られた医療用アンドロイド、つまりセクサロイドだ。なんでも、かつて地球で生きていた女性がモデルだという。

学

「素粒子ワープ走行発生機関異常なし」

そして有紀学。武装パート担当で、ルイとは訓練学校の同期生だ。曲がった事が嫌いで、命令を無視し、無茶な行動に出ることがやら多いが、隊員の信頼は厚い。

閑話休題。

ビッグワンの出場準備は進む。

ユキ

「人工重力発生開始」

オペレーター

「ビッグワン、第5装備で出場」

任務によつて、繋がれる車両は違つ。今回は第5装備が指定され、その装備を搭載した客車が車両停車場より出される。

オペレーター

「第5装備、異常なし」

第5装備用の客車が連結される。

ユキ

「上昇フロート固定確認」

宇宙空間を走行するには欠かせない装備が、各車両に装着された。

隊長

「微速進行、発进位置へ」

デビット

「微速進行」

そして、ビッグワンはゆっくりと進み、発进位置へとつぶ。

デビット

「ボイラーア内圧力上昇、シリンドラーへの閉鎖弁オープン」

隊長

「メイン回路接続!」

デビット

「接続!」

学

「システム、オールグリーン！」

発進準備完了である。

オペレーター

「38番線よりの発進を許可します」

ルイ

「発進許可、確認」

発進許可が降りた。

バルジ

「ビッグワン、発進！！」

デビット

「ボイラー内出力120%！！」

命令とともに、汽笛が鳴り、巨大な動輪が動きだす。ビッグワンは有名な999号と同じ、SLがモデルの車両である。機関車のナンバーはG8001。片側に8つの動輪を持つ巨大機関車だ。そして、その汽車に引かれた12両編成の列車が、今大空へと旅立つていく。

発進（後書き）

もはや「ナンのファンファイクションが怪しいですが、次話では新人が登場するので、ぜひ期待。」

現場到着

ビッグワンは一路910号へ向かって、空間軌道をひた走る。

ユキ

「910号は、テスティニーから500宇宙kmで停車中。」

ビッグワンの最高スピードは3000宇宙kmだから、約10分もあれば着く距離だ。SDFの車両は一般車両のスピードの3倍近い速度で走れる。さらに馬力も高い。ビッグワンは500万宇宙馬力を誇る。これは有名な999号の2・5倍の出力だ。

ルイ

「ビッグワンの現地到着予定は9分45秒後です。」

隊長

「ビッグワンは現場に着き次第910号に連結する。『テビットはビッグワンに残ってくれ。学とルイはそれぞれ第一、第二分隊を指揮し車内の捜索を行ってくれ。ユキは科学捜査班とともに遺体の検分に当たってくれ。」

バルジ隊長が到着後の方針を定める。

全員

「了解!!」

一方、緊急停止した910号では新一が遺体の検分を行っていた。

車掌

「探偵さん。何か分かりましたか？」

新一

「詳しいことは本格的に検死してみないと分かりません。ただ、僕の意見を言わせて貰えれば、死因は鋭利なナイフで心臓を突いたことによるものでしょう。恐らく、即死です。それと血が乾いていませんでしたから、死後そんなに経っていないはずです。ところで、SDFの方はどうなりました？」

車掌

「たつた今『デステイニー』を出発したそうです。そんなに離れていませんから、10分もあれば到着すると思います。」

新一

「それはありがたい。」

SDFが現場に早く到着できれば、事件の解決はそれだけ早くなる。彼らがこれば、乗客からの聞き取りや、遺体の検死が行えるからだ。

車掌はそして行ってしまう。一人になった新一は少し考え込んだ。

「しかし、運が悪いな。」

心の中でさうつぶやく。久しぶりに彼女と会える日これがである。

「なんて言い訳しようか。」

殺人事件の現場では不謹慎なことと思いつつも、ついついそんなことを考えてしまつ。

「とにかく、SDFと協力して、さつさと事件を解決しねえとな。」

そこまで考へていると、辺りに汽笛の音が響いた。（宇宙で音は普通通りませんが、空間軌道内には一応空氣があるところだ。）

ユキ

「現場に到着しました。」

ルイ

「910号からの報告では、車内での混乱はありません。」

バルジ隊長に次々と情報が入る。

隊長

「バルジグワソは直ちに910号と連結、全員先ほど打ち合せたとおりに行動せよ。」

全員

「了解！」

隊長

「あと、有紀。コスモセイバーは常に発進できるようスタンバイ

させておけ。」

学

「了解！コスモセイバークルーは常時発進態勢へ。」

後部車両で待機するクルーに発進待機命令が出る。

コスモセイバーは優れた飛行能力と索敵能力を備えた戦闘機で、
格納庫車両からカタパルト発進する。

隊長

「よし、連結させろ。」

ビッグワンから車両間連絡用のチューブが910号に渡された。

現場到着（後書き）

よつやく4話目です。いよいよ新一とSDFの合同捜査が始まります。

今回コナンとともにベースとしている銀河鉄道物語は毎週金曜日深夜、TBS系でやっているので、興味ある方は見てみると良いですよ。

SDF 捜査開始

ビッグワンと910号が連結し、バルジ隊長を始めとする隊員達が次々と乗り込む。

隊長

「SDFシリウス小隊、ただいま到着いたしました。隊長のシュワンヘルト・バルジです。」

車掌

「感謝します。」

2人は互いに敬礼する。

隊長

「早速ですが、現場へ案内していただきたい。」

車掌

「はい、こちらです。」

車掌はバルジたちを事件現場に案内する。

隊長

「ところで、遺体には、誰も近づけていませんね。」

車掌

「いいえ。実は私立探偵の方が乗っていたので、捜査協力を。」

隊長

「探偵?」

バルジが怪訝な声をあげる。

車掌

「いいえ。実は私立探偵の方が乗っていたので、捜査協力を。」

「ええ。あ、の方です。・・・・・工藤さん。SDFシリウス小隊が到着しました。こちらは隊長のバルジ氏です。」車掌に言われ、新一はバルジの前に出る。

新一

「始めてまして。一級探偵の工藤新一です。銀河鉄道からも公認を受けています。失礼ながら簡単な搜査をしました。もちろん、現場は荒らしていません。」

新一は身分証を見せる。

隊長

「そうでしたか。」協力感謝します。私はSDFシリウス小隊隊長のシユワンヘルト・バルジです。」

ルイ

「え！工藤新一。」

驚きの声をあげたのは後ろにいたルイだ。

学

「なんだよルイ。」

ルイ

「やだ有紀君知らないの。工藤新一って言つたら、17歳にして数々の難事件を解決した少年探偵よ。TVでよくやつてるじゃない。はじめまして。お会いできて光栄だわ。私はルイ・フォード・ドレイク。」

学

「俺は有紀学。よろしく。」

2人はそれぞれ新一と握手する。

新一

「いらっしゃい、よろしく。」

隊長

「おい！俺たちの任務は事件の解決だ。そういうことは後回しちろ。」

2人（学・ルイ）

「了解！」

しばらくして、ゴキをはじめとする医療班が乗り込んできた。
その医療班の一人を見て、新一は声をあげた。

新一

「あ、お前はアイ。」

そこにいたのは、同郷出身の高野アイであった。

アイ

「あら、工藤君とまさかこんなところで会えるなんて。」

その喋り方はどこか冷めている。

新一

「おめえこそ、銀河鉄道に就職したとは聞いていたが、まさかS
DFとはな。」

アイ

「まあつもる話はまた後で、仕事があるから。」

そう言つて、アイは行つてしまつた。

（かわいくねえ女。）

そんな事をふと思つていると、バルジ隊長から声をかけられた。

隊長

「ところで、工藤さん。」

新一

「あ、はい。」

隊長

「今の所判つていいだけです。あなたの今回の事件に関する考え方を聞かせていただきたい。」

バルジ隊長は早速事件の捜査にかかつた。

新一

「はい。まず今回の事件は、外見からの判断では、被害者の心臓を鋭利な物で刺した刺殺。被害者はおそらく即死です。ただ、凶器は見つかっていません。」

隊長

「では、凶器を犯人がまだ持っていると。」

新一

「その可能性が高いです。」

バルジ隊長はそう新一が言つと、学とルイに指示を出す。

隊長

「有紀、ルイ。2人は分隊を率いて、金属探知機による乗客の持ち物検査を行つてくれ。それと、不審人物に関する聞き取りもだ。」

2人（学・ルイ）

「了解！」

こうして、SDFによる検査が開始された。

解決への糸口

遺体が現場から運び出され、910号からビッグワンの医務室に運び込まれる。そしてユキによる検死が行われた。

その間に、他の隊員（学やルイ達）たちが乗客からの聞き取り調査や、現場の鑑識作業（アイの担当）を行う。その手際の良さは、新一が今まで見てきた各惑星の警察よりもすばらしい物であった。（さすがはＳＤＦ、そこいらの警察よりもすげえ。）

ふとそんな事を考えてしまう新一であった。
しばらくして、隊員がバルジと新一のもとに集まってきた。検死と、車内調査の結果が出たのだ。

ユキ

「被害者の死因等については、工藤さんの言われたとおりでした。

」

アイ

「体内に特別、薬品などが混入された形跡もありませんでした。検死にあたつた2人の報告は、ほぼ新一の推理どおりであった。

隊長

「被害者の身元については？」

これは新一も一番気にしているところであった。

ユキ

「被害者は惑星グレア出身のチャールズ・ヘンダーソン34歳と判明しました。現在、管理局に、詳細なデータを求めています。」

隊長

「わかった。管理局からの連絡がありしだい、知れせてくれ。」

ユキ・アイ

「了解！」

そうして、医療・鑑識担当の一人はビッグワンに戻つていった。

隊長

「次に、有紀、ルイ。車内調査の結果を言ってくれ。」

学

「はい。1から5号車までの乗客の聞き取りと持ち物検査を行いましたが、特に不審な点は見られませんでした。」

ルイ

「6から9号車も同じでした。」

隊長

「そうか。」

報告を信じる限り、今のところ乗客の中に不審者は見当たらない事になる。

新一

「ところで、有紀さん、ルイさん。頼んだ方はどうでした？」
ここで、バルジ隊長は怪訝な顔をした。

隊長

「なんですか、それは？」

新一

「実は、現場のトイレに行つた人物を調べていただいたんです。なるほど、現場に行つた人物の中に犯人がいた可能性は高い。」

隊長

「なるほど、では有紀、ルイ。そっちの方はどうだったんだ？」

学
「はい。調査の結果、3人いました。ですが、その3人はいずれ

も凶器らしき物は持つていませんでした。」

隊長

「そうか・・・・だが、一応話は聞いておきたい。すまないが
その3人を連れてきてくれ。」

学・ルイ

「了解！！」

2人はその場から直ぐに離れた。

と、そこで、バルジの携帯無線機に連絡が入る。

隊長

卷之三

そして、会話を終える。

新

卷之三

ええ。偵察にでたコスモセイバーのパイロットからの報告では、軌道上に凶器らしき物が捨てられた形跡はありませんでした。それと、管理司から被害者に関する重要な情報が入りました。

新

重要な情報(2)

「ええ、
実は
・・・
・・・。
」

解決への糸口（後書き）

果たして重要情報とは?「ひづ」期待。
御意見・御感想お待ちしています。

重要な鍵

「一体なんなんです、重要な情報つて、バルジ隊長?」

バルジ

「すぐに分かります。有紀、ルイ!」

2人（学・ルイ）

「ハイ!」

バルジ

「被害者がの席まで案内してくれ。」

新一の質問に答えなまま、バルジ隊長はそのまま3人を引き連れ被害者のヘンダーソンの座席へ向かった。

学

「ここです。」

2人掛けの座席には何もない。新一は網棚にあるトランクケースに目を向けた。

バルジ

「有紀。そのトランクを出してくれ。」

学

「ハイ。」

彼は言われたとうりにする。

降ろされたトランクをバルジが開ける。しかし、中には普通の日常用品しか入っていなかつた。

ルイ

「特に何にも入っていませんね。」

ルイが少し落胆した声を上げる。しかし、バルジと新一はそこに気づいていた。

新一

「おかしい。」

学

「え？ 何がですか？」

学にはそれがわからない。バルジがそれを説明する。

バルジ

「有紀。このケース。外見の大きさにしては容量が変に少ないと思わないか？」

学

「え？」

学はもう一度注意してみる。確かに、大きさに比して底が浅い気がする。

ルイ

「まさか。」

ルイも気づいた。

バルジは無言でトランクケースの底に触れる。そして、しばらく触っていると、底が外れた。そしてそこには、長方形の物体が敷き詰められていた。

学

「コスモガンのマガジンだ！！」

ルイ

「じゃあ被害者のヘンダーソンは・・・」

新一

「ルイさんや有紀さんもわかったようですね。恐らくこれは武器の密輸でしょう。確かにこの列車の終点は惑星リゲル。そこは被害者の故郷である惑星グレラの反政府軍の拠点とされていますから恐らく

く。」

そこから先をバルジが引き継ぐ。

バルジ

「工藤探偵の言つとおりだと俺も思つ。実は被害者のヘンダーソンは以前一度SDFに逮捕されたが、直後に釈放された経歴がある。罪状は武器密輸だ。だが、結局武器は見つからなかつた。恐らく以

前からこうして運んでいたんだろう。」

学

「じゃあ犯人は顔見知りでしょうか？」

ルイ

「けど乗客名簿を調べた限りじゃ被害者と繋がる人はいなかつたわよ。」

学

「それじゃあ無差別！？」

学が仮説を立てた。しかし新一はすぐに否定する。

新一

「有紀さん。それはありません。被害者には抵抗した痕跡がありませんでしたし。けど、犯人の日星は付きました。バルジ隊長。ちよつと調べて欲しい事が。」

新一はバルジに自分の考えを告げた。

バルジ

「わかりました。」

こうして、事件は大詰めを迎える。

犯人

現場そばの廊下に新一、バルジ隊長、、ルイ、そして910号の車掌が集まっていた。

車掌

「犯人がわかつたんですか？」

新一

「ええ。」

新一は大きくうなずいた。

新一

「ではまず被害者について、バルジ隊長、説明をお願いします。その言葉に、バルジ隊長が小さくうなずいた。

バルジ

「まず被害者の死因は、鋭利な刃物により心臓を刺されたことにによる即死です。ですが、凶器は現場に残つておらず、また乗客に対する調査でも発見できませんでした。加えて、軌道上に捨てられた痕跡もありませんでした。」

車掌

「ちょ、ちょっと待つてください。それでは犯人は列車内にはいることになりますね。もしかしてどこかで脱出したということでは。」

その車掌の言葉に、バルジは笑つて否定した。

バルジ

「いいえ、それはありませんな。どんなにあがいても、車外へ出るには扉をこじ開ける事になります。それは車両の記録に残される

事になりますから無理です。」

車掌

「では、どうやつて。」

訳がわからないという表情で車掌は言った。

新一

「答えはただひとつ、犯人は車内にいて、そして凶器を未だ持つているということです。」

車掌

「しかし、乗客の中には凶器を持っている人物はいんかったんでしょう。では一体誰が。まさか、乗員の中にいるというのですが?」
910号には食堂車が連結されていて、ウエイトレスもいる。その他にも車内販売要員も乗り込んでいる。

ルイ

「食堂車のウエイトレス、車内販売員にも乗客と同様の検査を受けてもらいましたが特に不審人物はいませんでした。それに、彼らには被害者との繋がりさえありませんでした。」

車掌

「では。一体?」

バルジ

「実は1人だけまだ調査していない人物がいるんですよ。」

その時のバルジの言葉に、車掌はハッとした。

車掌

「え! ? ま、まさか! !」

新一

「わかりましたよね。まあ分かつて当然でしょうね。あなた自身のことなんだから。そうです。あなたですよ車掌さん。つまり犯人はあなただ。」

その言葉に、車掌の表情は凍りついた。

車掌

「ば、馬鹿な。何故私が見ず知らずの乗客を殺さなければならぬ

いのです?」

バルジ

「見ず知らずではない。」

車掌

「え! ?」

ルイ

「あなたの出身は惑星グレア。被害者と同じ。しかも小学校から高校までずっと同じでした。」

バルジの言葉をルイが引き継いで言った。

車掌

「そ、そんな。そうだからと書いて面識があるという証拠にはならないぞ! !」

バルジ

「証拠はまだある。」

車掌

「! ! ? ?」

事件一気に解決へ向かっていた。

犯人（後書き）

この話は、コナン原作者の青山さんが好きな映画に銀河鉄道999をあげたことを知った時考えました。ただ999では話が作りにくいため、続編の銀河鉄道物語とのコラボになっています。

事件解決

新一

「有紀さん。」

車掌

「！？」

新一の言葉と同時に、学が現れた。

新一

「見つかりましたか？」

学

「ええ。」

そう言つて彼はなにやらペーパーホルダーの包みを出した。

車掌

「そ、それは！！」

車掌の体がブルブル震えている。

学が包みを開く。すると、中からナイフが出てきた。

新一

「凶器に間違えありませんね？」

学

「ええ、綺麗に薬品で洗われていましたが、柄の部分にかすかに血液が残っていました。」

照合の結果、間違えなく被害者の物です。そして、これが出てきたのは・・・車掌さん。

あなたの鞄の中からだ！！」

決定的な証拠である。しかし、それでも車掌は悪あがきしようとする。

車掌

「私じゃない！..もしかしたらそのナイフを誰かが私の鞄に仕込んだのかも。」

往生際が悪い。

だが、新一達にはさう「追い撃ちをかける手段があつた。

新一

「まだ吐きませんか。それなら、」新一ももう一つの証拠を出すまでです。」

車掌

「もう一つの証拠! ?」

新一

「ルイさん。説明を。」

指名されたルイが喋り始める。

ルイ

「これは死体を検視したユキと医療班のアイからの報告です。被害者の遺体には一点不審な点がありました。それは出血の量が少ないことでした。調査の結果、血液中に血液凝固剤が混ざっているのが判明しました。」

車掌

「・・・・・」

ルイ

「そしてその血液凝固剤は洗つても液中の特別な薬品で反応が出るんです。」

車掌の顔が驚愕の表情になる。

学

「ナイフから反応はしつかり出ましたよ。そして、車掌室に置かれていた手袋にも。車掌さん、あなたがつけていたね! !」

車掌

「! ! !」

学

「」の手袋は銀河鉄道乗務員専用の物だ。他の人間が持てる物では

ない。これでもまだし

らを切るつもりですか車掌さん！！」

ついに、車掌は負けを認め、その場につづくまつた。

車掌

「く、くそお！……あいつがいけないんだ。以前、あいつが武器密輸をしてSDFに検挙されたとき、俺が武器を隠して逃がしてやつたのに、それを金を払わないと本社に通報する

つて言うから。あいつは恩を仇で返したんだ！！」

バルジが彼の腕を掴む。

バルジ

「そういう話はディステイーに帰つてからゆつくり聞かせてもらおうか。殺人罪で逮捕する。」

車掌の腕に電子手錠がはめられた。

新一

「一件落着ですな。」

新一が学たちにねぎらひこの声をかける。

学

「いいえ、こいつはまだやることが残つています。」

バルジ

「そのとつだ。車掌不在のまま列車を運行させるわけにはいかん。

これより、ビッグワ

ンは910号を惑星ベイカまで牽引する。準備にかかる！」

学・ルイ

「了解！」

もつとも、既に乗客にはビッグワントラムに移つてもらつていたので、

910号からビッグワ

ンに戻り、連結するだけだ。

すぐに連結し出発できる。

ところが。

ファンファンファン！！！

突然サイレンが鳴り響いた。

そこへ、ビッグワンに残っているデビットから連絡が入る。

デビット

「隊長！緊急事態です。すぐにビッグワンに戻ってください……。」

新たなる脅威

バルジ・学・ルイ、そしてなりいきでついてしまった新一を含む4人はビッグワンの指令車両に駆け込んだ。

バルジ

「どうしたデビット。」

デビット

「緊急事態です。」

ユキ

「流星群が多数接近中。きょう1000宇宙へ。到達までおよそ2分です。」

バルジ

「何！？」

宇宙空間において流星は脅威である。銀河鉄道軌道上には空間シールド、そして車両自体には磁気シールドが張られていて、スペースデブリ等の小型の物ならなんとか排除できる。しかし、それとは比較にならぬほど高速で動き、かつすさまじい質量である流星はそれら防御装置を破る可能性があった。

学

「後2分、すぐそこじゃないかー…どうして気づかなかつたんだ！」

ビッグワンの高性能機器ならもっと遠くからでも探知できるはずである。

ユキ

「流星群自体がレーダーに映りにくい物体でできているようです。接触まで後1分30秒。」

バルジ

「時間がないな・・・・既に乗員乗客はこちうに移している。910号牽引は破棄。乗客の生命維持を最優先とする。ビッグワン緊急発進！！」

バルジは910号の車体を放棄することにした。連結している時間がもはやないからだ。

デビット

「了解！ビッグワン緊急発進システム作動！」
デビットが機器を操作すると、すぐにボイラーの圧力が上がり、発射可能数値に達する。

汽笛が鳴り、16の動輪が勢い良く回り始め、それにつづいて1両編成の列車が動き始めた。

デビット

「間に合ってくれ！！」

ビッグワンは発車時の加速が遅いという大きな欠点がある。そしてついに流星群が到達し、モニターには木つ端微塵に砕け散る610号の映像が入ってきた。

ルイ

「直撃を回避しました！！」

持ち場であるコスモレーダーに座つたルイが報告する。
隊長

「ビッグワンは全速で現田域を離脱する。」

全員

「了解。」

その光景を、新一は唖然とした表情で見ていた。それほど見事に全員連携しているのだ。

隊長

「工藤探偵。現状では車内への移動は危険です。あなたはそこにある予備座席に座つてください。」

新一

「え！？あ、はい。」

新一は指示されたとおりである。

デビット

「よし、このまま一気に惑星ベイカへ行くぜ……」
しかし、再び警報が鳴った。

ユキ

「新たな流星群接近中！…重力場変動によつて詳しい数がわかりません。到達まで後2分。」
ビッグワンに危機が迫る。

ルイ

「流星群、数え切れません。すごい数です。」

ルイの悲鳴にも似た声が指令室内に響く。

バルジ

「有紀、戦闘用意！…ビッグワンに直撃する可能性のある流星を排除する。」

学

「了解！」

戦闘パートの学がすぐに武装システムのチェックをする。

バルジ

「主砲用意！三式空間榴散弾装填！！」

ビッグワンの4両目には3連装の主砲を三期搭載した砲塔車両が連結されていて、バルジはその使用を決めた。

学

「了解、主砲三式空間榴散弾装填！！」

主砲塔が旋回し、砲身が仰角を上げる。

ルイ

「流星群、射程距離に入りました。」

バルジ

「主砲発射！！！」

学

「発射！！」

発射トリガーが引かれ、すぐに9条の青いビームが伸びていく。

しかし、それはすぐに分散しすさまじい光の壁となつた。その光の壁が隕石を粉碎する。

新一

「す、すごい。」

モニターに映し出されるその光景にしばし啞然としてしまつ。

ルイ

「流星群の75%を排除。残り25%はなおもビッグワンに接近中！」

バルジ

「コスモバルカン迎撃用意！！」

学
「了解！！」

客車側面の屋根が開き、ズラリと並べられた30mmコスモバルカン砲が姿を現した。

学
「掃射！！」

銃身が回転し、黄色い細い光の粒がすさまじいまでの弾幕を作る。それらが一つ、また一つと隕石を捉え、破壊していく。だが、それら迎撃網をかいくぐり、ついに隕石の一部がビッグワンを直撃する。

すさまじい振動が列車を襲つた。

バルジ

「ダメージチェック！！」

デビット

「機関部異常なし、戦闘速度維持できます。」

ユキ

「第6号車両に直撃、幸いシールドで防ぎました。乗客に異常はありません。ですが、シールド損傷、出力70パーセントに低下しています。」

学

「武器系統その他は異常なし。」
幸い致命的なダメージは受けなかつたようだ。だが。

ルイ

「流星群第三派が接近、最大規模です！！」

バルジ

「落ち着けルイ。もつとくわしく報告しろ。」

バルジに諭され、ルイが冷静さを取り戻す。

ルイ

「すいません。数は概算だけで先ほどの二倍。大きさも非常に大きいです。」

数はともかく、大きいのは非常に問題である。

たとえ数メートルの大きさでもその破壊力は無視できない。

バルジ

「それほどだと武装だけでは無理だな・・・・・・・・よし、こうなつたら。」

全員

「？」

バルジ

「無軌道走行用意！-！」

危機との戦い

新一
「無軌道走行？」
デビット
「文字のとおりだ。了解、なんとか切り抜けて行きます。無軌道走行モードへ移行。ビッグワン、無軌道走行開始！」
その途端、ビッグワンは空間軌道を外れる。

銀河鉄道の列車は基本的には敷設された空間軌道上の走行しかできない。しかし、SDFの車両はその用途の特性上、空間軌道はなくとも走れる無軌道走行システムが附加されていた。
ただし、もちろん軌道はないから操縦員が方向や車体の姿勢制御をしなければならない。その資質を問われる時ともいえる。
ビッグワンは流星群に向かつて走っていく。

バルジ

「有紀、進路上で回避できないものだけを撃て。」

学

「はい。」

その間に、ビッグワンは流星群に突入した。
巨大な塊が次々と後方に飛びぬけていく。

ルイ

「2時方向に流星！」

学

「主砲発射！？」

回避不能のひとつを、主砲から発射されたビームが打ち碎いた。

デビット

「よし。」

すかさずデビットが、そこに生まれた空白地帯へ進路を変更する。
宙返りやロールといった特殊な機動を見事にこなし、次々と流星

を回避していく。

新一

「すゞい。」

モニターに映し出されるその光景を見ながら、ため息交じりでつぶやく。

今まで彼は多くの事件をといてきたが、こんなスリルのある事件はなかった。

新一

「そういえば。」

かつて、両親から散々聞かされたご先祖様のことを思い出した。自分とまったく同じ名前だったその人は、17のとき、謎の組織に薬を飲まれ幼児化し、姿を偽っていたという。そしてその姿で爆弾事件や脅迫犯との戦いに身を投じていたという。そのたびにそのご先祖様は命の危険にさらされていたと聞いた。

今自分も同じような事態に直面していた。

新一

「いや、俺なんてまだまだ安全か。」

新一がそのように考えている間にも、シリウス小隊の面々は流星をかわしていく。

しかし、ついに一個が直撃した。

バルジ

「ダメージチェック！」

ユキ

「最後尾車両に被弾。車内からの空気漏れが発生しています。」

バルジ

「最後尾車両の連結を解除。シールド出力最大。」

最後尾車両は展望車で乗客はいない。バルジはすぐに捨てる決断を下した。

車両が1両捨てられる。それによってわずかばかりだが重量がへり、機動性が向上する。

ルイ

「3時方向に流星！」

学

「コスモバルカン掃射！」

ビッグワンは流星群を駆け抜けていった。

その後、デビットの神業的操縦と、学の的確な迎撃を続けたおかげで、ビッグワンはなんとか無事に流星群を突破することが出来た。そして元の空間軌道に戻り、無事、910号の停車駅である惑星ベイカに到着した。

新一もここで下車だ。

駅ではここから先へ向かう乗客へ、代替列車の案内や、切符の払い戻しに駅員が追われていた。

新一はその光景を横目に見ながら荷物を持ってビッグワンからプラットホームに降り、改札に向かおうとする。

?

「工藤さん。」

後ろから声をかけられた。

新一が振り向くと、そこには学が立っていた。

学

「事件解決のご協力、感謝します。」

ピシッと直立不動のまま敬礼する学。

新一はそんな彼に少し微笑みながら言つ。

新一

「いえ、自分はまだまだですよ。今回の事件もSDFFが早期出動してくれたから解決できたようなものです。それに皆さんのがいなければ自分が今ここに立つて居ることもなかつたでしょう。こちらこそ感謝しています。」

学

「・・・・うですか。また、いつかお会いできる日を楽しみにしています。」

新一

「ええ、またお会いしましょ。では。」

新一はそうして学と別れ、改札口から外に出た。

改札を出てしばらく歩くと空から汽笛の音がしてきた。見上げると、ビッグワンが煙を引いて、上昇していくところであった。

新一

「ＳＤＦか・・・・・まあ蘭の所に急がないと。」

彼は再び歩き出した。

ヒューローク（後書き）

ようやく完結です。この作品ではコナンのキャラと銀河鉄道物語のコラボに挑戦しました。また時間が空いたら別作品で挑戦したいです。では。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4229b/>

銀河鉄道殺人事件

2011年7月13日22時14分発行